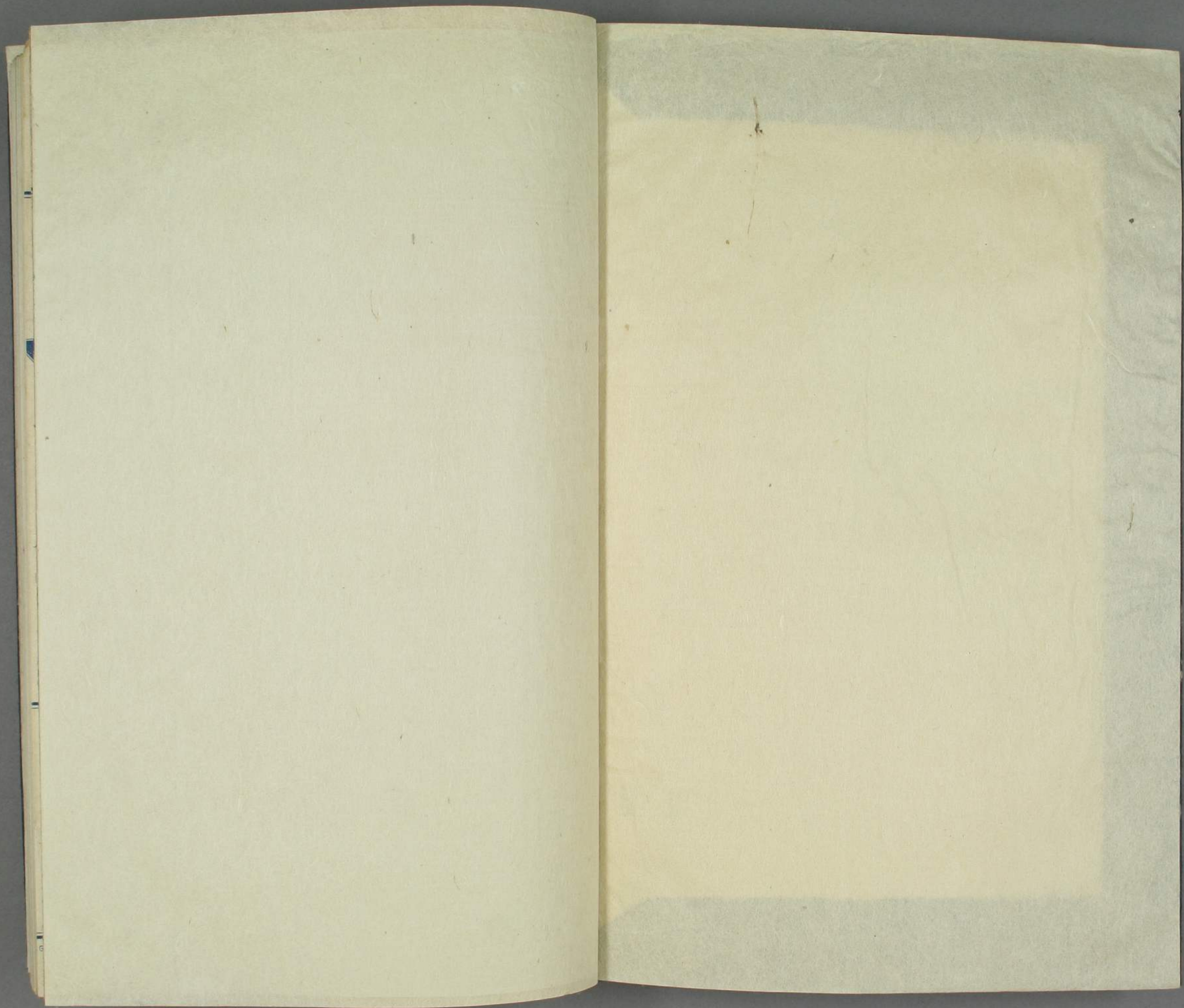


卒業論文断簡

特別
5112
7





900

明治六年六月五日請取
第十八號

卒業論文

40-9030



は、プロトと共に出何人か覺醒を以てしを得
 たらん。プロトは國民の一身とし、之れを
 自撃して、美術の衰微を豫知し、詩人と其の
 理想的共和國より全然排斥せしむ、偶然にあ
 らざりしや。又、メナシの如き、少年は
 常に少年をして若成人を嘲弄せしめ、少年は
 倫理の規律に従はぬと可なり、犯罪は終に
 結婚し社會の尊重する一身となり、すべしは、
 其の犯し、罪は同感せしむべし、かゝる言ふ
 か、如き假定の下に筆を執りし力のゆゑと云ふ

不安定な意味、
 不安定な意味、
 不安定な意味、

不安定

は、其の影燈の如何は推知せうし、
れ、之れとて、古時々の希臘人の甚しき隨處を
思は、劇持と観者との孰れが甚しく腐敗せし
か、前者の後者に及ばし、影燈のみ特に重要
視すべし、其の疑はきを得ず。

第三 歴史上の影燈

宇宙の現象は千差万別なり、平等の如きは
観れば、一心の上より収まり、葉末の一露に
て、單なる人の而して之れを差別の本より観れば、
千態万状窮りたし、事々物々差別の相を現は
せ、人生と行爲との如きは、因果の理法錯綜
し、相俟せし一縷の會線をすら看出す人にと
容易はらず、單に劇に就て其の能動所動の影
影を史的に考察すべし、終に七羊の嘆を免れ
れ、果して劇の責任は即ち在るか、如何は

かり當時の思想の傾向を現はしたるもの當時
一般の道德心より進歩すること進歩しし
退けしこと又進歩したるもの何れ如何なる場合
に、道德上或は善とせられ、或は悪とせられ
しかり抑て又劇即ち藝術と道德との本領が
同俾如何の凡そ此等の諸問題は容易に説明し
難し、又其の證據とすべし資料の選擇も容易
ならず、當時の人心と時勢と劇に如何に影響
し、劇の如何に社會に及ぼすべし、之れが
證據も亦頗る難し、唯人の劇の社會及び人心

に於て了影響を是非す、善悪の標準が、倫理
上道德上今尚一定せざるもの、假令善悪の概
念は古より變らざるもの、其の内容たる我
々の觀念の時と處とを異にして、大に善悪
了と如何せん、若し或劇をして凡俗に及し凡
教と實し社會に悪影響を興へたりと非難せん
とせば、是が倫理上道德上善悪の標準を定め、
劇の主觀的意趣が目的等を考へ、當時の凡
俗と凡教とを知らし、而して後に劇の及ぼ
せる影響を判せたり、其の影響の善

た場合、
合藝術として、
を豐富高貴ならしめて、
少積極的の善果を成せしむ疑ひかたし、
其の善果と疎畧にせし感は、
れを思ふは、
は、
例と括して、
は、
論旨抽象に走り、
且つ偏頗の誇と免れず

了のみならず、
世人前、
人として、
これに先づ、
史に上りて、
習を具叙し、
理論的判斷の材を^作らんとす。
古印度劇は宗教に起源せしこと、
其の影響は分朋たらず、
宿命教に基けし教旨を現はし、
優人は囃し

重んじられしと謂ふ
希臘の悲劇喜劇其の源を異にせり
は祭祀に於ける唱聲より發せしや
其の宗教との關係は常に保持せられし
これ希臘の悲劇の公衆に及ぼせし効果
を考ふるに必要なり
たの事實なり
エリキリアの劇格は復讐を司
る女神アトリスの演ぜらるる
と見たり
公衆の畏敬を懼せし
たか、
了事實あり
たり
か、
了宗教の力を藉り
たれば
たり
エス
キラ
の天才は寧ろ崇高を描くに
なり
て、
超人

南洋堂特製

的半神英雄及び運命の如き
不可抗の力を寫すに巧みなり
すれば希臘の悲劇を完美せし
ソフオクリースの作と共に
毎に宗教上の信仰に密接せり
は等々神の正しき事、
道義の不變なる事
と描きし
か故に、
當時の觀劇者は
知らず
知識を信仰と通念とを
深くし、
罪を惡み、
弱者に同情する
の念と
おのづから強めたりし
なり
然るに
時勢の變じ
信仰衰ふ
に
及び
は、
ソフオクリースの手腕も
如何とす
能は
ず、
改め
て
出で
し
ユ
ー
リ
ビ
テ

一は、^ハりりり、^スの如き人物と、舞臺にて嘲
 蓋^テ非難せられたり。此は自己等の愛する例
 純潔ならぶりしか故に也、發達するに隨ひ、
 希臘喜劇の起源は、前より言へる如く、元來
 ば、^ハりりり。
 希臘^ニありし、此れに在りたり。此れは、
 是れは、其の責任の起因は寧ろ希臘の人心
 加^ハし、何と云はれ、希臘喜劇の人心は腐敗し
 りと謂はる也。而も此の悲劇を以てするは、
 當時の人心に悪果を及ぼせりとは言はれ、
 加^ハし、何と云はれ、希臘喜劇の人心は腐敗し
 是れは、其の責任の起因は寧ろ希臘の人心
 希臘^ニありし、此れに在りたり。此れは、
 ば、^ハりりり。
 希臘喜劇の起源は、前より言へる如く、元來
 純潔ならぶりしか故に也、發達するに隨ひ、
 蓋^テ非難せられたり。此は自己等の愛する例
 一は、^ハりりり、^スの如き人物と、舞臺にて嘲

一は、^ハりりり、^スの如き人物と、舞臺にて嘲
 蓋^テ非難せられたり。此は自己等の愛する例
 純潔ならぶりしか故に也、發達するに隨ひ、
 希臘喜劇の起源は、前より言へる如く、元來
 ば、^ハりりり。
 希臘^ニありし、此れに在りたり。此れは、
 是れは、其の責任の起因は寧ろ希臘の人心
 加^ハし、何と云はれ、希臘喜劇の人心は腐敗し
 りと謂はる也。而も此の悲劇を以てするは、
 當時の人心に悪果を及ぼせりとは言はれ、
 加^ハし、何と云はれ、希臘喜劇の人心は腐敗し
 是れは、其の責任の起因は寧ろ希臘の人心
 希臘^ニありし、此れに在りたり。此れは、
 ば、^ハりりり。
 希臘喜劇の起源は、前より言へる如く、元來
 純潔ならぶりしか故に也、發達するに隨ひ、
 蓋^テ非難せられたり。此は自己等の愛する例
 一は、^ハりりり、^スの如き人物と、舞臺にて嘲

弄す事と一許容したる自由寛大也了奉騰
 人の其の喜劇の要果の甚しきと痛感し、法
 に依つて判限せんとせしと以て證明せらる
 アリストフエーヌの鋭利嘲笑と、聖言
 以て想像力と、多变的なる特徴等々、プロト
 ーと共に何人も恐らくは驚嘆す所なる人も、
 而も諸神制度、^{為政者}醉非東詩人、一私人及び婦人に至
 しまひ、若くも名ある者も公衆の面前に於て
 毫も忌憚なく、無慈悲に罵倒し嘲笑し、且つ
 之れを煩る卑陋なる言語を以てせし点に就て

一の疑問として存し置らむ。

羅馬に多り、羅馬

又ナコカ一以後の希臘の喜劇翻譯^カや染^カて、^カ何
 馬人に及ぼし、影響は一層要用なる^カ、^カ羅馬
 馬の劇史を信せられれば、^カ詳し^カは知つた由
 此、^カ若し羅馬人の劇は自由と後述の概
 會とと與一なり^カ、^カ心か^カ種^カ其結果に就ての
 記載^カ、^カ古昔の羅馬人の極致は、
 單に國家に熱中し^カ、^カ了、^カ實際的^カに^カ物
 と悉く擯斥せしが^カ、^カ隋^カ、^カ劇^カ、^カ達^カ、^カ好^カら^カれ

今七
 羅馬の劇と言へば、今も歴史上不完全の例
 算に数へらる。希臘に於ては、
 程也詩人及び美術家は希臘に
 常に名譽を有し、尊重せられ、
 羅馬は文學を初め、下等の人々、貧窮せる外國人
 と、奴隷とに開拓せられ、演劇、
 懶惰の觀て物の
 かつ、思惟せられ、最も薄待せられ、
 儂人を作
 者、階級指彈せられ、劇場に奴隷より自由民に
 与り、若くは奴隷との手に、
 希臘の劇詩
 は羅馬の「プロウタス」に貧賤の
 日僱人に
 殆どこと、翻譯せられ、又、
 又、
 翻譯は翻譯
 翻譯は翻譯

今七
 羅馬の劇と言へば、今も歴史上不完全の例
 算に数へらる。希臘に於ては、
 程也詩人及び美術家は希臘に
 常に名譽を有し、尊重せられ、
 羅馬は文學を初め、下等の人々、貧窮せる外國人
 と、奴隷とに開拓せられ、演劇、
 懶惰の觀て物の
 かつ、思惟せられ、最も薄待せられ、
 儂人を作
 者、階級指彈せられ、劇場に奴隷より自由民に
 与り、若くは奴隷との手に、
 希臘の劇詩
 は羅馬の「プロウタス」に貧賤の
 日僱人に
 殆どこと、翻譯せられ、又、
 又、
 翻譯は翻譯
 翻譯は翻譯

哲学として、^{（観望し理會するを得）} 事隔り能はる。人民の面前に尊^{（た）}りて、
 其の善所と没却せられ、^{（初し）} 之れに代^{（り）}りて、
 羅馬の特種^{（殊）}の詩とせりりしが、^{（故）} 假令
 彼の聞歌^{（の）} 或人民に^{（た）} せられ、國家の詩^{（の）} 可^{（し）}し、
 演劇^{（の）} 場^{（に）} 行はれし、^{（は）} 演劇を^{（し）} 帝國の衰
 頹滅亡^{（の）} 専ら所作^{（の）} 途上に^{（は）} 行^{（は）}りて、
 其の^{（り）}

基督教國

何の時代を指すや基督教の初とみるべき事
 二世の事と思ふる即ち羅馬帝國の末盛
 し此等の事と思ふる

初の頃には、演劇を異端と聞繫ありと
 されば、劇を一時絶えり、後

演劇の歴史

程経て、道德劇宗教戯起りしが、此は正劇たりね
 ば、序はかり一言せば、之は宗教熱心家が其作
 者なりしよし、拍らむ、一般の宗教的觀念を高
 らしむる方便として、用ゐらるる、善悪正邪の
 争鬪の標象的演扮の内、一種の道化を、
 至れり、其影寫宗教上よし、道德上よし、美学
 上よし、將善なりしとは言はれり、
 演劇の羅馬に最上権を得しは、十六世紀復興期
 より此方より、古文学の復興、新世界發見等に
 見事に増し、人民の好尚に應じしと

哲学として、^{（観望し理會する）} 羅馬の面前に、^{（去つ）}
れど、^{（其の善所を没却せられ、之れに代ふ）}
づき、^{（羅馬は特種の特種詩とせり）} 羅馬に、^{（故）} 假令
彼の國歌、^{（其の善所を没却せられ、之れに代ふ）} 羅馬に、^{（故）} 假令
り、^{（其の善所を没却せられ、之れに代ふ）} 羅馬に、^{（故）} 假令
類、^{（其の善所を没却せられ、之れに代ふ）} 羅馬に、^{（故）} 假令
りき。

基督教國

基督教の初の頃は、演劇を異端と關係ありと
て、^{（其の善所を没却せられ、之れに代ふ）} 羅馬に、^{（故）} 假令

程経て、^{（其の善所を没却せられ、之れに代ふ）} 羅馬に、^{（故）} 假令
の序、^{（其の善所を没却せられ、之れに代ふ）} 羅馬に、^{（故）} 假令
者、^{（其の善所を没却せられ、之れに代ふ）} 羅馬に、^{（故）} 假令
ら、^{（其の善所を没却せられ、之れに代ふ）} 羅馬に、^{（故）} 假令
争鬪、^{（其の善所を没却せられ、之れに代ふ）} 羅馬に、^{（故）} 假令
至れ、^{（其の善所を没却せられ、之れに代ふ）} 羅馬に、^{（故）} 假令
上、^{（其の善所を没却せられ、之れに代ふ）} 羅馬に、^{（故）} 假令
演劇、^{（其の善所を没却せられ、之れに代ふ）} 羅馬に、^{（故）} 假令
より、^{（其の善所を没却せられ、之れに代ふ）} 羅馬に、^{（故）} 假令
依りて、^{（其の善所を没却せられ、之れに代ふ）} 羅馬に、^{（故）} 假令

花
の
心
を
や

て、大戦^{サキ}朝^{サキ}の西班牙、伊太利、英吉利に救興^{サキ}もるに至りぬ、中よも英吉利に新劇の木鐸となり、幾多の新詩人輩出^{サキ}して人民の爲に言^{サキ}ふ、一般人間の高大高尚粗野兇悪なる性格を巧妙に其作に描映せしめ、エリカマス王朝の劇の如き、社會の好尚と需用との鏡となりて、益々燦爛たる光と社會に反射せしめ、然るに此光華を雲間に洩れし日光に蒸されて、忽然開きし花光人目下閉く見え、間に再び入る日と共に消失せし如く、輕て暫且よして、後よは身と顛はし、いと怖しき

ピリメンと假名をよみ又ハ只ハピリメンと
ハ厚書ハ俣トハハカ何

一と吹荒工せしものから、清信徒のいさき推板に遇ひぬ、後王政復古となりて再び劇を興行せらわしが、劇詩をチャールズ一世の頃のものより一際悪くになり、淫褻残酷此えちしり悲劇の代りた、此度々悪徳を奨励せし如き喜劇演せらるゝに至り、其影響大に風俗を紊せり、かくして十八世紀に至りては、ゴールドスミス及びミエリカシの喜劇を底きては、又大劇詩出下ふりしが、名優を出よき、されども此世紀の後半に於ける宗教の復興を、劇と相容れぬ

花
の
心
を
や

て、大戦^{サカ}朝々西班牙、伊太利、英吉利に救興^{サカ}まゝに
至りぬ、中よも英吉利に新劇の木鐸となり、幾多
の新詩人輩出して人民の為に言^{サカ}ふ、一般人間の
高大高尚粗野兇悪なる性格を巧妙に其作に描
映せしめ、エリカ、マス王朝の劇の如き、社會の好
尚と需用との履となりて、益、燦爛たる光と社會
に反射せしめ、然るに此光華を雲間を減れし
日光に蒸されて、忽然開きし花光人目下閉くと
見え、間に再び入る日と共に消失せし如く、起
て暫且よして、後よは身と顛はし、いと怖しき

種風に舞臺を吹荒工せしものから、清信徒の
いさき抵抗に遇ひぬ、後王政復古となりて再び
劇を興行せらわしが、劇詩のチャールズ一世の
頃より一際悪しくなり、淫褻残酷此光の
り悲劇の代りに、此度々悪徳を奨励せし如
き喜劇演せらるゝに至り、其影響大に風俗を紊
せり、かくして十八世紀に至りては、ゴールドスト
クス及びミエリがこの喜劇を除きては、又大劇
詩出でふりしが、名優を生よき、されども此世紀
の後半に於ける宗教復興、劇と相容れぬ

花の心をや

此所引イキリス劇を以て唱道新
仙術劇を度外視せしむるは
り置る可し

けい
程
きり

了、謹慎せし公衆も又劇を誓拒しにりしが、場主
の注意して僅に余脈を繋ぐを得しり、其れより
か出し久しく間置たり梨園に、
花と観るに由ゆ、世々漸くアセ
こゝ独舞台となりて、轉じ寂寞の観を託つめり、
劇詩の古時歐米に演せられた人心を動かし
つは、多くは社會的問題と解釋せし類にして、各
國の梨園靡然アアセこの喜劇に傾けし観を呈
せし、此情熱の厭世家が目下の社會的疑問と
解く鍵を持つが故なりと、感らばアアセし

喜劇の動機は強に思ひませずや
角が喜劇の動機は強に思ひませずや
この云ふまへにたふ方よりかえん

の喜劇は抽象的觀念を具象的に表現せしむる
ものなりと否うは姑く措き、其現今の人心の傾
向を具象的に表現せしめて、再び社會に及射せ
しむる影響は如何なるか、此を今後に徴して知
りしむる

之を要するに我等の史に於て觀察せし所は依れ
て喜劇も喜劇も其影響は善かりき、羅馬
も亦同トかりしと知る也、翻つて

支 那

と見ると、戯曲に之に深之、明の國と共に喜、清

けい
程
きり

了、謹慎せし公衆も又劇を誓拒したりしが、場主
の注意して僅に余味を繋ぐを得しり、其れより
アラウニコカビシク久しく間空たりし梨園に、
エリカ王朝の花と観るに由ゆ、世々漸くアセ
シテ独舞台となりて、轉じ寂寞の観を託つめり、
劇詩の当時歐米に演せられた人心を動かし
のは、多くは社會的問題と解釋せし類にして、各
國の梨園靡然イフセシハ喜劇に傾けし觀を呈
せし也、此情熱の厭世家が目下の社會的疑問と
解く鍵を持つが故なりと云、感らばイフセシ

ハ喜劇々抽象的觀念を具象的に表現せしむる
ものなりと云ふは姑く措き、其現今の人心の傾
向を具象的に表現せしめて、再び社會に及射せ
しむる影響は如何なるか、此を今後に徴して知
りしむる

之を要するに我等の史に於て觀察せし所は依れ
ば希臘の悲劇ハ喜劇ハ其影響は善かりき、羅馬
ハ英吉利ハ亦同トかりしと知る也、翻つて

支 即

と見ると、戯曲々之に深之、明の國と共に喜、清

の起りに迄ひて再び盛となりぬ、支那は流石に古より文字の國と呼はれ、脩辭上の規則を重むべし、國民はれど、見ると是れ戯曲多し、然れども支那の戯曲と曲に重くして對話に軽く、演下たる様格を我能と目下といへば、勿論唱歌の是居りて、予が謂ふ言葉と重むる芝居は入れ難き種のものなれども、彼國は之を捨つれば又劇といふ物なす也、叔此劇を如何なる影響を人心に及ぼし、予詳知せざらば、棄てしに朝廷戯曲と科擧の二に數へたる程なれば、隨て作

る人々の多くは讀破万巻の人にして、其最之心を灑ふは曲に在りといへれば、花鳥風月と詠びし詩歌と同トく、そのは影響と思へからふりしならむ、又其曲殊に名曲の一齣若くは數齣を歌ひ所作に表はす優人は、多くは権門、文士の備ふ所なりしと聞けば、我優人の作者と凌ぶし如き勢カはあらかりしなり、隨て玩弄の活入形々如うりし此優人に入心と左右し影響を及ぼしむる程、カありしとも思はれざり也、縦一渠等々、幸甚翁閑情雜記に言へり、如く、慶、場、寺り

の對話へ又々言葉と爲し、猥雑なる卑陋は、
西落誣語を試み、とはいへ、戯曲のまはるは曲
に在れば、此の如きものに、聽者専ら氣を留め、
り、ならむ、要するに此國の戯曲と文人の閑事
業、彫虫の末技とせられ、か故に、風流三昧の娛
樂の資とせられ、之より社會に影響を及射せ、
む、勞力あらぶりが如し、

日本

我國歌舞伎の影響を觀ると先づ、注意すべき
は、其影響は直接に劇の邦進よりせ、かといふ

言ふ迄もなく詩ありて、優人あり、演劇あり、劇場
あり、詩と主として餘を委ねるが故に、希臘より
の歐羅巴諸國より、概ね其影響は主として劇詩
よりせ、事は、上に觀察しにり、か如し、然るに
我歌舞伎は其起源神祇縁あり、は、希臘より似
しれど、影響の幸に優人より出、とは我に著し
き所な、一、初代市川段十郎十四歳、紅粉を全
身に塗り荒事を演じてより、え祖尾上菊五郎月
本武者之助信田左衛門の二役より、古今稀は、
狂詩を受け、より、劇詩の趣向喝采を受け、事

中は、多くは、素直、早替りの如き、優人の技藝に
らむは、獨逸の事柄より、鳴き、新替を得たり、我
れは、作者の量に如く、常に優人といふ夫の影
に、隠れて、看者に、明うに見えぶり、是れ何等
の理に依るか、思ふに、第一の理由、昔時の歌舞
伎の曲の節奏を具し、り、が故に、何國の
男舞より、正劇の資格を備ふに至れ、迄の我
歌舞伎の曲は、皆節奏的なり、事々人の、よく知
る所也、抑、節奏的の詩と、之と聽く人の、心界とは、
割合に、單線なり、耳感の印象と、浮は、む、もの

たれば、言葉の劇に於て、耳感より來る印象が、其
人の心界に種々の念を伴生せしむるか、如きに
ありむ、されば、斯く節奏的の詩を演じ、歌舞伎
は、淺慢は、徐進的の詩に伴はしむるに、空間的
に、看者の目と、娛ましむる物と、趣向し、快樂に不
足せし、心念を惹りしめ、以て、看者を、迷せしむ
る、必用あり、衣裳を、華美し、敏捷に、動作せし、舞
伎、即所作、身振の、我劇に、精妙なり、(ア、ソ、ウ、に、於
て) 先づ、發達せし、は、此必用に、應じし、もの、よて、之
が、若し、脚本の、發達、大に、妨られ、違れ、より、事々

疑ふべからず、脚本の必用を辱く感せしめしと、
優人の作者を兼ねしとは、作者と不利に陥らし
めし原因也、蓋し昔時の芝居には狂言作者と定
まりし者なく、花事方にて彌五左衛門といふ者、狂
言と仕組むに妙を得し、はむれ狂言として二番續
き三番續きに綴りたるが、狂言作者の初より、
之れを優人の作者と兼ねし偏せりき、第二の理
由は専門作者の無学なりより蓋し地位を貶まし
事也、渠等々天才なきが上に、其を補ふ学識に乏
しく、天才なく、学才なく、恃む所なきより、自尊心

と失ひ、自尊心なきが故に、優人の只管社會の喝
采を受くると見ては、之に阿り、唯其の年齢や柄等
にあてはめて狂言と仕組む、以て評判を得し
め、優人の敬心を買はむと努め、正劇起りて二
百数十年間、我等々作者の名にて見物と呼ばし
は、此治助(櫻田)を以て嚆矢とせといふを聞
きては、我輩豈振然ならざるを得むや、葉林子歌
阿彌を姑
く阿れ斯く作者に勢カなかりしは、優人の勢カ
ありし証として、優人々勢カありより、他に掣肘
せられず、他に掣肘せられざるより、自由な發達

一、終に我丰園ガリーリッ、ミッドトレス、マクレネ
一、等ル方リゴリ、名優ヲ多く出シ、一、七格一む
に更らぶ一、

是より其影響ヲ考ふに、淵源故ト汚濁一たり
キ、着よ阿國名古屋山左ト通テ放逐セられてよ
リ、住渡島興惣次メ遊女ノ歌舞々、女歌舞伎ヲ都
鄙に流行セ一めて、世に放蕩者ノ數ヲ殖やし、都
下大夫ノ苦象歌舞伎亦大に弊言ト成候一、と
テ、孰れモ禁止セられ、美應二年村山又兵衛百方
カト盡一テ官許ヲ得、物真似狂言盡給一、はく

又悉く禁止せられ、此此外大坂芝居の初、三河
屋久四郎の女舞の禁止、壇屋六左衛門の座元
、中の芝居の停止など、教ふれば猶有りぬべし、
凡そ此等の禁止及び停止の原因々、皆劇が實際

此知今や文章の眼をうてを要す

盲風俗と紊亂セ一め一故なり一か、否

かは分明ならぶれども、其原因の多くは優入の
声色に關係一たり一事ヲ掩ふべからず、容貌と
風采とは優入の資格と他の技術者より殊なら
一む一ものなれども、素其資格の一要素たるに
過さず、敢て我優人々今に此一以て人と感動

一、終に我輩園ガリーリッ、ウ、ヒッ、ド、ス、マ、ク、レ、テ、
一、等、に、方、り、ぶ、り、一、名、優、を、多、く、出、し、一、と、括、し、む
に、是、ら、ぶ、り、一、

是より其影響を考ふに、淵源故に汚濁したり
き、若くは阿國名古屋山左と通じ放逐せられてよ
り、佐渡島興惣次、遊女の歌舞、女歌舞伎を都
鄙に流行せしめて、世に放蕩者の数を殖やし、都
ろ大夫の苦象歌舞伎亦大に弊言をなほし、と
て、孰れも禁止せられ、美應二年村山又兵衛百方
力と盡して官許を得し、物真似狂言盡翁はなく

又悉く禁止せられしり、此外大坂芝居の初、三河
屋久四郎の女舞の禁止、壇屋六左衛門の座元な
り、中の芝居の停止など、教ふれば猶有りぬべし、
凡そ此等の禁止及び停止の原因は、皆劇が實際
より一層風俗を紊亂せしめし故なりしか、否
かは分明ならぶれども、其原因の多くは優入の
声色に關係したりし事と掩ふべからず、容貌と
風采とは優入の資格と他の技術者より殊なら
しむしものなれども、素其資格の一要素たるに
過さず、故に我優人々今に此を以て人と感動

て一むるものよ、よして此等には藝の妙を加へ
し人、川原物と賤しむ言下に、矛盾の辨證と致し
しむるも、理をまじらぬか、

三世瀬川如事が原案に出た。由の「花野遊戯猫
鷹稿の奉行所より差止められしは、清朝に『水滸
記』禁せられしが如く、治世に好言ありし故なき
づく、縦一黙らむとも、脚本の故と以て禁止
せられしは、世れよは甚稀也、

章まゝに徳川氏の時代となりて天下泰平と極
めしより、能ら種々の弊風生じ、豪者放蕩靡然と

了、到る處人心を感染せしめし故に、此悪影響
と専ら劇に帰せしは酷よして且偏頗なすべし
と云、名優の一代に数へられし三代月中村歌右衛
門の如き、舞台の飾付衣裳諸道具に最も華美と
盡し、自らも非常に贅澤と極め、殊に「杜若慶子白
猿」の時に至りては、前後例なき豪者極
めしりといふ説もあれば、概して劇の當時の者
移し一層誇りたりしなりし、加ふるに當時
の作者も、優人の意をのりて、抑し輩なりければ、
斯る名優の著後に相應しき趣向を構へ、人氣を

得させむと努めしやが、及、叔父も水戸新前守忠
知に在り破却せられむとされしものならぬ、若
し当時遠山左衛門尉つては、武藏原頭草薙の
所は、我等今日古剽擄の跡と観よりしならむ、
要するに我歌舞伎と宗教家とをきしめふれど、我
度り有司と憚りき、是れ我國民の趣味低きと、優
人の内行廢りに放蕩せりしとに歸せしき罪に
外ならむ、

嗚呼、ありては美術自然と合し一丈に觀を呈せ
し劇、此の如く何處にも常に非難せらるゝ、は何

故を、假令善美と一せと思へりとはいへ、当時
の愚蒙の輩と殊なり、直に詩人と知れしアラト
しとして猶劇詩人々許多の材料と理性の静穩
中より、激情の紛擾中より看出し易きが故に、往
觀者に魂の高上せし部分の行為より、下方に
し部分の行為を示す傾ありと言はしめ、又「舞台
は公衆の性情を高むるより、墮落せしむるに
力あり、劇舞臺の優人、己が氣質を取らしめて
以て公衆を感化しめしむるより、且最も悪しき
事とは、看者の最も野卑しして且明白せし性情

と喋々して以て娛まうめむと一易きとと痛
嘆でーめーは向故を、現に劇の花まう、向正面
連こして、此等に人氣を得むとて若き事は、漸高
尚より看客と感染せしむれば、此非難を理なき
にあらむ、ルソーも又難まらう劇を教情と知
げむして、教情、我等の関らぬ教情とは清浄な
ら一むら、我等が有まらぬやば、熱煎き又劇
と女々しき念と娛樂を求むる心とを熾ならし
め、且人としてある演技を見て起し、古りよ
情緒と、倫理上の原理をなす行為とを混せしむと、

此等の非難を何れに帰まらざり、詩人よか、劇詩
より、優人よか、看客よか、若しルソーの非難を
前後通して考ふれば、固より看客に在り也、蓋し
看客劇に行く毎に、新しき歡樂を得よより終に
之に耽られて、職を忘れ身も忘れ、遊情の徒とな
り、或は假設の人物に眞實情を投ず、劇りに悲喜
哀歡を感ふの結果を、心情を弱からしめ、却りて
倫理上の同情測定の鋭鋒を触らむに至り、或は
實際界に経験せなく、教育なく、美術の趣味低く
人よして、劇り場、劇に入し、美術上の假情を樂

一み慣れ一果は、實際具と荒涼寂寞と感下、周邊
の勇士の劇の主人公に酷肖せざるを憤り、或は
悲しき役を扮し愛らしき役と勤め一優人とも、美
術上の感情を以て見せしむる情を以てし、實際
に憫み慕ふが如きは、概ね罪着者に在りて、劇の
関せざる所也、

然れども、熟過去の實際下微して考ふに、劇の
人心を蠢毒し風俗を紊乱せしむるが如く見せしむ
心も一も當時の傾向及び人心（看者）の不支
全を映寫せしむるならざるが、殊に優人より來る影

響の如きは、古來非難の燧点と謂つべく、此ら
劇の最も腐敗し易き所、最悪の影響を多く與へ
たるものとして断言して不可なきが如し、理より言
はば、優人の詩人の詩と言葉と所作とに解釋
せしむ、分析の他のあらゆる方法を以てせよ
り、或は優人のそのなれば、斯くとも看者より數
等高尚よりして、竟く人情を解し、入聞の弱所を看
破し、之を已下者と得べき筈なると、實際と大に
之に反し、品格及び生活の常入より降下し、數等、
此數等劣れたる品格及び生活々又最も注目せら

れ易きより、常下（内行と技藝と混同せらるゝ）
と常下（れど）最良の感仰の愛慕も、人々の、更
に大なる感動を興へ、更に悪弊を増す也、此れ何
故か、意ふに此れ優人といふ者、譬へば愛情悲哀
と美学上の位置に現はし、前者の感情（愛情を
て感情とて）と藝術を得る便宜機会を有する
より、故ら下粉装声色以て漫りに良家の子女と
欺き、己が感情を満ちせしめむとせしよりと、常
に美学上の反感を以て演せしより、技熟ししに
随ひ、益々反感の助けを借らて、反感に移り易くな

り、終に想像界に住めしむる思惟し、實際界と已
が演せし美術の材料の倉庫とより外見せ、人の
實際の苦悩辛苦と、全く舞台にて演せし如き
技藝と見做して、感情に移らば、實際同情感も
しとせしに至ると、今一つの理由を、前と矛盾も
しつゝにて實際をせぶる理、即彼等が性質中情
緒最し過度に修練せられし事、人間の氣質
や性情を舞台上に再現せしむるか考に要し、彼
等が敏捷神速はし感納性、其が實際の生活に
於て自らと欺くと珍しからず、或は優人常に公

正剛毅のまに人公のこゝと扮さるゝにあらば、其が能
力も自ら其方に吸収せられ養化せらるゝべしと
言、優人々種、の役を勤め變化の妙を得むと欲も
るものから、忽ちよして英雄、忽ちよして悪漢、道
化方となりて、扮さるゝ役より呂性高めらるゝ、に
由せし、

又詩人に就て考ふに、美術の若くは美術主義に
動つたれ、極端寫實主義を以て材料を採擇し、看
者を幻惑せし事久しかりき、昔客美の欠乏せし
劇詩も廢られしと我度よりして、狹隘偏少なりし

^動懲^主主義の劇詩に、盡感せられし事と我度よりし
て、罵詈譏諷人身攻撃の劇詩に、耳を刺撃せられ
しと我度から、寧ろ社會人心の趣味と維持せし
むる事に、カキ盡さかりし詩人も多かりき、世に
あり、場主に諂ひ、優人に媚ひて、人間の弱所を罵
り、他人の内行を許さ、瑕疵のこゝを識詰し、又猥雑
たる事をも艶筆に上ぼせて、向正面連の教心と買
はむと努めしもの多かりき、觀去り觀來れど、詩人
も優人も、或は少數の意見を以て多數を瞞着し、
多數の鼻下き趣味に應じむとして、高尚なる趣味

の少数と歴創し、當時の社會の半徑の影象を、劇
に全徑こして社會に反映せしめ、事少くはら
ぶ也。

然れども劇の此等の事情を、正當に言は、美術
は劇より常にあらわして變也、劇場を教ふる
所ならず、故に看者と教育とのせめとせば、其
本來の性質に遠へり、若し又看者は益を得むか
否に、教と受けむか否に、劇場へ趣くとせば、正
しく目的と動機とを混同せしもの也、人々生きむ
とて履きしむらむ、履せむとて生きしにあらぶ

るべし、人々美を樂しむ愉快を得むとて劇へ行
く也、利と得教と受けむとにあらぶ、之と要す

官能的美。今少し易き語のなきか

の趣味を專ら官能的美と欲せし、劣
情と溢せしめむとの境界を超越し、感情の満
足と美学的の愉快とを甄別し、趣味一般に高尚
となすに隨ひて、必し劇の光彩輝然と耀るべし、
之れ予が私論にあらぶ、
然れども退て熟考ふると、劇の影響の善悪を味
して上の如く言ひ易からず、何となれば純理上
よりは美術よりは、美術本来の約束ありて其を果

の少数と歴創し、當時の社會の半徑の影象を、劇
の全徑として社會に反映せしめ、事少くはら
かす也。

然れども劇の此等の事情を、正當に言は、美術
は劇より常にあらむして變也、劇場を教ふる
~~所~~下あらむ、故に看者と教育とのそのとせば、其
本來の性質を違へり、若し又看者は益を得むか
為し、教を受けむか若し、劇場へ趣くとせば、正
しく目的と動機とを混同せしもの也、人々生きむ
として履きしはらむ、履せむとして生きしにあらむ

るべし、人々美を樂しむ愉快を得むとして劇へ行
く也、利を得教を受けむとにあらむ、之と要す
に、人民一般の趣味を專ら官能的美と~~致~~し、劣
情を溢せしめむとの境界を超越し、感情の満
足と美学的の愉快とを甄別し、趣味一般に言尚
とせしに隨ひて、必し劇の光彩輝然と耀くべし、
之れ予が私論にあらむ、
然れども退て熟考ふると、劇の影響の善悪を決
して上の如く言ひ易からむ、何となれば純理上
よりは美術よりは、美術本来の約束ありて其を果

は、美術上の能力了はれりとし、其間に倫理上の善悪の判別を容るゝ、必用なりとし之を審くべければ也、如何に高尚なる美術なるも、其と感納せし人の能力、趣味、性質等に依りて、大に其影響と殊にせしと言はるべければ也、後なるは今と言はむ要なれば、請ふ少く前なる理と言はむ。

抑、希臘のソクラテス、プラトニ以来、真善美即一也との説は、頗る勢力ありしに於て、幾多の哲学者及び美学者の味方と有せり、然れども此説

は畢竟絶対平等の邊より觀せし説なれば、美術と道德哲学と善悪とを對する邊よりは、見解と殊にせしむべからず、真善美の三者本原同く、各其極下到達すれば相同しく、發しては三者の別と現下、各一は絶対又々平等又々理幹といふ一に融合せしを、發して再び融合せしは、三者を各其差別相に就て説明せしむべからず、何となれば善一極真即極善即極美といふ一觀念に基き、善なるが物と不美と判決せしを得べからば、初より此三差別と善もを要せしむべし。

正格流
ついでに
下

ければ也、故に我等今美といひ、真といひ、善といひ、
ついでに、其真相を觀むに、未だ差別せざる平等絶對
の邊より、また我等は唯差別せざる三者を
觀るに、各、同、絶對に融合せざるに拘らば、美を
感ぜしむる美術を、明らに真を釋く哲学を、善を
教ふる道德を、殊なると知り、此邊より出立して、
其等々殊別を窺ふを得ば、是れり、美と具象的に
表現せし美術に、我等又何を求善求真の用と問
はむや、

美術と哲学と道德と、理想又と絶對の現は一方

と殊にまゝ上へ、隨て美術家の職分を、哲學者若
くは道德者のと、殊ならぶべからば、假令彼等
最高義に於て、其内觀相似しりと云、發して、真善
美の殊別を為せし上へ、彼等が天職を混同せし
くともあらば、何れか美術者の天職といふや、曰く、
彼が天職を、實に美学的價值ある物を作りに在
り、如何に哲學者の如き幽玄高尚なる觀念ある
か、道德家の如く純潔清廉の思想あるかと、美術
者を詰問せし人せし、よもや孔子老子が美術
的價值ある物を作らば、釋迦基督アリストオト

ル、示カルト、カントも亦作りとは言はざらむ、昔は希臘人善美を表はすに一語を用ゐりて、善、眞善美差別の上より言へば、相殊なると此の如ければ、一美術に由るは、哲學的觀念を望み、高潔なる道德的觀念を望み、遂には學術の益に立たむと望み、風教の用に使はむと望むは、豈美の支華と云へば清濁をいふにあらざるや得むや、故に曰く美術の道德的哲學的に傾けしは、美術其物の偶然の傾向よりして、美術と此偶然の傾向に向つて同等の責をも有せざるやと、

意ふに此差別見を以てすれば、古來幾多の劇詩家及び慶入々、唯理想と美なる象に現下、若くは其具象的の美を解釋表現せしむるより、觀念のわりが故に、偶、其目的に附隨せし大なる非難と受り、に足り、古來何れの國の劇も、度ふと殊がれ、皆其目的を達せたりと言はれ、累年此責積載されし汚名を雪ぶ得べし、如何にも彼等々故意に着者の神経を刺撃して、欲火情炎を煽動せしめしにあらざらば、美の力を藉て着者の感情を牽き怡ばしめし以上と、其間に倫理上の罪過と容

わ難かり、然れども我等は又一方に真善美の関
繋此の如く疎隔ならで、極りて親密なる間柄は
くとも知らぶらばからむ、蓋し倫理的意識を最
く人心に起り易く感し易きものに於て、其性質
を分明ならざるは、昔も我等一擧一措一挙一歩の
行爲をだに為さむとせしに臨み、常に得し言は
はれぬ心地を以て、判別判断を興ふるものなれ
ば、詩人の作し履人の扮する時は、心むの層
此意識深ぶらば、廣義に人間は道德的の物せと
いふも之れあふが爲にして、真に於ても亦然り、

"Beauty, Good, and Knowledge are three sisters
That doat upon each other, freinds to man,
Living together under the same roof,
And never can be sunder'd without tears,"

Tennyson.

かゝるが故に真を具體的とせば美となり、善を抽
象とせば真となり、善を具體的とせば美となり、其
因縁浅からぶらば、其本來の性中相互を介
取包舎するが故に、一美術よして其が真善の介
子欠乏せりと非難せらるゝは、取りと直さず

成せし其美の量に文をあらしと示せしもの也、
~~然らむともし、~~己が姉妹と假令偶然にも不
幸の位置に陥らしめて、恬然顧みざるが如きは、
我れ天啓神靈に美術の道に取らぶる也、我れ
さる物も美術の上乗と呼ぶと躊躇さる也、何んが
故ぞや、曰く、真の美術の上乗なる物々、之が術者
の想像も健全ならぶるべからず、術者の健全な
る想像も絶妙高大なる美術を製作する要石に
して、彼れ想像健全ならむと固より思ふ萬有
の外に馳せ、八面玲瓏たる理想の極致を觀むる

21
不能はむ、善の極真の極美の極一言を以て掩は
、絶体といふ其境界に飛翔し得らむと、
其作一世を歴し名声赫々たるも、
や忽ち滅する燈の如く、
ハ一見朦朧たる星火の如きも、
其真遠く其光燦爛終に人と驚嘆捧伏せしむる
に比しては奈何、思ふは高尚なる詩を書きしむる
は其が生活と高尚ならしむる要石と
トの言はまじし、之も高尚なる詩を書きしむる
高尚なる生活と若し居る人々と替へて初て可

ならむ、高遠、遠路、大天地想と我輩籠の物と
して、衆生の美物と満ちせしむると同時に、優に
又其等の理性と道徳心とを感懐せしむる大詩
人、何為姉妹と拒く可憐の美と孤立せしむる要
あらむ、美術の上乗とは斯く天才の作と云ふとい
へ、蓋し此の如き天才の太陽（作）を、假令天帝
の如く能はぬと、善悪と等しく照らし、此の如
き天才の雨（作）を正知の上に均しく降すが
故に、徳を尊ぶるを保護する心用はく、真善を
教へふると、真善を感懐しむる也、此を諸人の

はらで徳高き名譽の上に應に理照らむ、

理論上の影射

ならむ、高遠、頭、豁、たる、大、天地、想、と、我、藥、籠、の、物、と
して、衆、生、の、美、物、と、満、ち、ま、り、む、と、同、時、に、優、に
又、其、等、の、理、性、と、道、徳、心、と、と、感、懐、せ、い、む、と、大、詩
人、何、為、姉、妹、と、拒、く、可、慥、の、美、と、孤、立、せ、い、む、と、要
あらむ、美、術、の、上、乘、と、は、斯、く、天、才、の、作、と、お、そ、い
一、蓋、し、此、の、如、き、天、才、の、太、陽、(作、)と、假、令、天、帝
の、如、く、能、は、ぬ、と、也、と、善、悪、と、等、し、く、照、ら、し、此、の、如

野翁上へ漫歌

故、れ、佳、く、も、た、り、と、思、ふ、は、何、れ、と、問、は、れ、ば、
此、の、可、愛、高、も、多、敷、く、王、の、小、歌、才、野、郎、也、と、い、ふ、

